

昭和女 大家政 清水薫 日野伊久子 ○猪又美栄子 加藤理子

<目的>運動機能性の優れた衣服の設計を目的として、着衣の歩容（歩きぶり）への影響を観察・測定し、歩行・階段昇降等の日常動作における、スカートの形態による拘束性の違いについて解明する。

<方法>被験者は普通体型の女子学生6名である。フレアスカート1種とスリットの縫い止まりの位置が異なるタイトスカート3種の合計4種のスカートに、比較のための水着、トレーニングウェアを加えて計6種の着衣で実験を行なった。タイトスカートの縫い止まりの位置は次のとおりである。タイト1：脛骨点の上10cmの位置、タイト2：脛骨点の位置、タイト3：脛骨点の下10cmの位置。なお、スカート4種の着用順序はランダムとした。実験方法は、あらかじめ足底にベビーパウダーをつけた被験者にラシャ紙の歩行路の上を歩かせて足跡を記録し、歩幅・両足間距離を計測した。同時にビデオレコーダーによる記録も行なった。さらに、歩行・階段昇降の場合の4種のスカートの拘束感について官能検査を行ない、検討した。

<結果>(1)歩幅に着衣の影響がみられた。ストライド長（たとえば、右踵から次に着地した右踵までの距離）の平均値は、トレーニングウェア：116.7cm，フレア：115.8cm，水着：115.0cm，タイト1：113.0cm，タイト2：109.0cm，タイト3：100.6cmである。(2)両足間距離には、1名を除いて着衣の影響はみられなかった。(3)官能検査の結果、歩行・階段昇降のいずれの場合も、拘束感のスカートの種類が1%の危険率で有意であった。また拘束感の強さは、階段昇・歩行・階段降の順に表われた。